被災地からあなたに

17歳新聞
2013 4月
［第 8 号］

編集委員

責任者	第８号編集長　澤山 初音 顧問教諭代表　横山 学
編集者	山形 生　川鰭 遥 藤島 紗都子　齊藤 愛莉
特別記者	鈴木 愛佳
ロゴ制作	齊藤 愛莉

大村 正樹さん
UHBで放送されている「U型テレビ」のメインキャスター。ツアーを企画し、取材をリードしてくださった。

被災地の『あと』

3月23日と24日の2日間、私たちは大村正樹さんの主催する「被災地を忘れない…取材ツアー」に参加させていただいた。気仙沼市、南三陸町、石巻市など宮城県の被災地を訪問し、現地の方々の話を聞き、津波で壊滅的な被害を受けた集落などで保存されている遺構を見学した。

その中でも、気仙沼市鹿折（ししおり）地区の陸地に乗り上げた全長60mの漁船「第十八共徳丸」は想像を上回る大きさで、震災の記憶を如実に物語っているようであった。南三陸町防災対策庁舎は、ここに集落があったとは思えないような何もない静けさ。震災遺構に対して、「解体してほしい」と「残すべき」との意見が別れるため、今後の存廃が決まっていないものもある。

しかし、どんな立場であろうとも、現地の人たちは口を揃えて言う。「一番大切なのは忘れないこと、語り継ぐこと」。これは今回の取材で一番印象強かったことであると同時に、災害を防ぐための最も大切なことであると感じた。

▲南三陸町防災対策庁舎。職員が最後の最後まで避難を呼びかけるも、3階建て庁舎屋上を2mも上回る津波にのまれた

▲道路はきれいに整備されているが、漁船の下には自動車が残る

実際に被災地を訪問することで、報道ではわからなかったことも見えてきた。被害の大きかった南三陸町や石巻市でも、被災地の人たちは震災の記憶から目を背けることなく、復興に向けてただひたむきに走り続けている。人々の思いを取材した。

▲気仙沼市立小泉小学校の駐車場に建立された「津波記憶石」

立ち上がった人がいる

100歩、200歩と進もう

「プラス思考第一」。南三陸ホテル観洋の女将である阿部憲子さんのモットーだ。高台にあるホテルも1階と2階が津波の被害を受けたという（地上階5階）。公の避難所ではなかったが、町を守らなければという思いでホテルを開放した。ホテルは町民の心のよりどころになった。震災当時を振り返り、「悲しみって底があるじゃないですか。でも、どこまでも沈んでいく感じ」と語る。蛇口から水が出ない、兄弟げんかができない。当たり前に過ごせることへの幸せを感じたという。

▲またお会いしたい、すてきな女将さん

どんなに苦しくとも「プラス思考は揺らぐことはなかった。ただただ前を向いて進んでいくだけ。1歩、2歩じゃなくて、100歩、200歩と進もうという気持ちで自分を奮い立たせていました」と立ち止まらなかった。

女将さんを支えたのは、復興を手伝わなければという使命感と仲間や家族に加え、縁もゆかりもなかった全国の人たちから寄せられる応援の言葉だった。今は「お客様の笑顔が力になる」という。

▲宮城県観光PRキャラクター「むすび丸」。ホテルなどで見かけ、グッズもある

こころに届けるピアノ

全国的にも珍しく、ホテルには託児所が併設されている。その名は「マリンパル」。女将さんの発案で20年前に設立した。そこには「被災地にピアノをとどける会」から贈られたピアノがある。札幌大谷では音楽科が中心となり、定期演奏会などのコンサートで寄付金を募って、支援活動をしている。ピアノは傷まないように、とても大切に使われていた。

復興とは？

2年経った今でも困っている人が困ったまま。しかし、復旧・復興が進んでいない現状はあまり知られていない。「多くの人に現地に来てもらい、見てもらいたい。足を運んでいただくことが大事な復興です」。ホテル観洋では震災を風化させないための「語り部バス」を運行させている。スタッフが体験談を語りながら町内を巡るバスである。義援金を送ることだけが支援ではないと感じた。

地元の子どもたちのために、そろばん教室や英会話教室を開いたり、図書コーナーを作ったり、仮設住宅に住む人にはお風呂の提供もしている。故郷の危機を何とかしたいという強い意志を持った、人として憧れる女将さんだ。

▲きらきら笑顔で癒してくれる子どもたちとやさしい保育士さん

知っていますか？今のこと

助かった命

「家が高台にあったから助かった。場所が違えば死んでいた」。そう話すのは、公立南三陸診療所の医師、西澤匡史先生。震災の翌日から救護所を立ち上げて診療を始めた。

南三陸町は津波によって病院をはじめとする町の機能の中枢を失った。現在は仮設の診療所があるが、病院といった入院可能な施設はないという。「住民の健康管理や医療が、ある程度町の中で完結する。これは最低限必要なこと」と病院の重要性を語った。

▲突然の取材訪問にも、快く丁寧に話してくださった西澤先生

震災の後遺症は今でも続いている。家族や仲間を失った人の心の穴は決して埋まることはない。被災で生きがいを失い、うつ状態になる高齢者も多いそうだ。こうした症状は災害直後だけでなく、時間が経ってから出てくることもある。

西澤先生は津波の被害には遭わなかった。「助かった命を苦しんでいる人のために捧げたい」。医師不足が続いているため、当直が震災前の2倍になったそうだ。町医者として自分にできることを続けている。

こころ休まぬ家

仮設住宅で生活する人にとって、一番大変なことは「暖房」だという。仮設住宅内では石油ストーブの使用が禁止されているため、暖を取る手段はエアコンのみ。しかし、なかなか部屋が暖かくならず、電気代も高くついてしまう。「いつも厚着してなんとか寒さをしのいでいる」と厳しい状況を話してくれた。

震災前は多くの人が広い家に住んでいたが、4人家族で四畳半二間の生活をする世帯もある。隣の家にも気をつかい、ストレスを抱えている人も増えている。震災から2年経った今でも、人々の生活は決して楽なものではない。

▲南三陸町の高台にある仮設住宅

「非常用持ち出し袋」の中身

震災以降、注目されることが多くなった非常用持ち出し袋。ペンライト・ラジオ・簡易トイレ・水・缶詰・ゼリー飲料など、中身のリストはさまざまである。だが、たくさんものを入れすぎてしまうと、重すぎて避難しにくい。袋の中は「自分が非常時に何に一番耐えられないか」を考えて最低限にしぼることや、「消費期限」の点検をしながら入れ替えていくことも必要である。防災関連のホームページなども参考にして、今一度、袋の中身を整理してみてほしい。

まだ震災は終わっていない

子どもの声は聞こえない

川を逆流した津波により、全校児童108名のうち74名が死亡・行方不明となった大川小学校。なぜ、このような被害が出てしまったのか。

石巻市の北上川河口から約4kmの川沿いにあり、小学校から川は見えない。津波が近づいていることに気づけなかったという。過去に津波が来たという記録もなかったそうだ。「津波が来るかもしれない」という危機感が薄かったことも理由に挙げられるだろう。

▲静寂に包まれ、冷たい風が吹いていた

2階建ての校舎は外形を残したものの、渡り廊下は崩れ体育館は流されていた。壁がなくなり天井もはがれた教室も多く、あたりには子どもの靴や小さなバッグなどがあり、悲惨な光景に言葉を失った。

遺族は震災当時の状況について事実確認を市の教育委員会に求めている。だが真相は明らかになっていない。未だに問題が続く大川小学校。震災はまだ終わっていない。

▲流されたアコーディオン

復興は『刺身』

犠牲者の中で、津波警報が鳴っても逃げなかった人の多くはお年寄り。今までの津波は自分の家まで来なかったから「今回も大丈夫だろう」と思い、逃げなかったそう。

石巻市の沿岸にある門脇（かどのわき）地区は、津波と同時に火災が起きた。門脇小学校にはその傷跡が残っている。校舎は焦げて窓も割れ、道には穴がある。そんな中でも、子どもたちはグラウンドで野球をしている。言葉では表せない光景だった。

▲アスファルトには「復興するぞ！」の文字。犠牲者を弔う花束は尽きない

この地区で洋品店を営んでいた遠山弘毅さんは、奥さんに促されてお店の金も何も持たず「軽い気持ちで裏山へ逃げた」という。そのあとに大津波が地区を襲った。下からは「助けてー、助けてー」と叫ぶ声。だが、どうすることもできない。助けに行けば波にのまれてしまう。そのうちに声が聞こえなくなった。

「復興は刺身と同じ。生ものなんです。だから早くしなきゃいけない。早くしないと腐っていくんです、人間が」と、今はテントでワカメや缶詰を売りながら話してくれた。がれきが片づくだけが復興ではない。

大切なこと

南三陸町立伊里前（いさとまえ）小学校は海が見えるところにあり、津波の被害を受けた。そこに勤める阿部正人先生は「校長先生の知識と決断力に救われ、被害が最小限となった」という。

▲防災について、わかりやすく熱心に話してくださった阿部先生

私たちには知識が必要だ。知識は復興のためにもなり、今後震災が起きたときには、被害をおさえるための決断力につながる。防災には「人のつながり」が大切である。1人では気づかないことも、周りからの声掛けで気づくことがあるだろう。

▲焼け焦げた自動車。そばには携帯電話が落ちていた

『そうぞう』力も必要である。被災地では何が足りないのか、私には何ができるのか、という想像力。自分にできることをする創造力。重機を持っている人は救急車を通すために道や橋を作り、被害の少ない地域の人はおにぎりを作って配るという例もあった。

先生は「いろいろな人から学び、考え、話し合って、持続可能な未来をつくっていく力を培ってほしい」という。復興を担う私たちに、とても大切なことを教えてくれた。

あとがき

がれきはきれいに片づけられているように見えましたが、よく見ると、中身が入った瓶など「人がいた跡」がたくさんあり、人が住んでいたということを改めて感じました。しかし残念なことに、多くの方が亡くなった被災地を軽い気持ちで訪れ「ピースサインをして記念写真を撮る人がいる」と聞いて、悲しい気持ちになりました。

メディアでは伝わらないことも知りました。例えば、支援物資の行き先。家が流されなかった人は避難所に行けず、物資を受け取ることができなかった一方で、余った食べ物が、賞味期限切れで捨てられたものもあったそうです。

「忘れないこと、それも復興のひとつです」。バスガイドさんの最後の言葉がはっきり耳に残っています。私たちはこれからも震災のこと、被災地の方々の思いを忘れません。新聞局として、個人として、被災地の復興のために情報を受信し、発信していきます。

紙面に書ききれなかったことは、学校のホームページに掲載するほか、5月6日の「吹奏楽スプリングコンサート」でパネル展示をします。よろしければご覧ください。

今回、貴重な機会を設けてくださった大村さん、たくさんお話をしてくださった東北放送の大井さん、仙南交通バスガイドの寺本さん、現地の方々、取材をサポートしてくださった方々、一緒に取材をした中高生のみなさん、この企画に携わったすべての方々に感謝しています。本当にありがとうございました。